俳諧

十萬發句集

秋

911.308
八
秋

俳諧十萬發句集 秋之部目録

秋之上

七月 初丁　文月　立秋　今朝秋 二丁
初秋 三丁　残暑 四丁　炑蠋　初嵐
冷 五丁　初月　稲妻　花火 六丁
七夕　星今宵 七丁　星合　星迎
星別 八丁　天川　貸小袖 九丁　立琴
梶葉　盆　魂奠　生身魂 十丁
衝突入　迎火　魂棚　棚經 十一
燈篭　切篭　瓜馬　蓮飯

分類番号 911.3
図書番号 2911
巻冊番号 1～8
聖和学園短期大学図書館

施餓鬼 十二　送火　墓参　盆
踊 十三　忘扇 十四　二百十日　相撲 十五
土俵入 十六　露　露時雨 十八　露霜
霧　秋風　桐一葉 卆一　柳散 卆二
木槿　常山花　蕣 卆三　蘭 卆五
藤袴　桔梗　芙蓉 卆六　秋海棠
女郎花　鼠尾草 卆七　野菊　萩
荻 卆　芒　花芒 卆二　まそほの芒
小車　蓼花　艸巻　水引 卆三
稲花　蓮実飛　瓢　西瓜 卆四
早稲　鉈豆　落水　残蚊 卆五

秋蝶　秋蝉 卆六　蜩　秋蛍
蜻蛉　蚕　虫　蓑虫鳴 卆八
鈴虫　茶立虫　竈馬 卆九　蟷螂
塒出鷹　鳴子　鳴竿　引板
案山子

秋之中

八月 四十一　八朔　田面日　仲秋
長夜　秋寒 四十二　朝寒　夜寒 四十三
うそ寒　野分 四十四　秋夜　秋雨
初汐 四十五　秋月　三日月　五日月
待宵　小望月 四十六　月見　名月 四十七

今日月 四十九　月今宵 五十　十五夜　十六夜
月　月雲 五十二　月雨　放生會
放鳥　駒迎　尾花 五十三　紫苑
雉頭 五十四　木犀　蕎麦花 五十五　花野
大蓼　蓼穂 五十六　刈萱　萱穂
芦穂　蔦　木通　鬼灯
唐辛子　稲 五十七　懸稲　稲刈
中稲　晩稲　稲舟　稲穂
綿取　大豆曳 五十八　粟　黍
芋　莨　辛子蒔　茸狩
菌 五十九　卜治　松茸　松露

蟋蟀 六十一　蚯蚓 六十　渡鳥　燕帰
雁　鴫 六十二　鴫 六十三　啄木鳥 六十四
鶉　小雀　椋鳥　鶺鴒
鳩吹　稲雀 六十五　鶸　鹿
落鮎 六十七　渋鮎　鰍　彼岸
砧　擣衣

秋之下

九月 七十　長月　舛市　后月
十三夜 七十三　月名残　秋山　秋雲 七十七
秋日　秋水　秋霜　秋空
菊 七十四　白菊 七十八　十日菊　残菊 七十九

俳諧十萬發句集 秋之部

洞海舎京谷編
一具菴一具技合

七月
文月

七月や[illegible]の夢か[illegible]　札[illegible]

文月に[illegible]稲[illegible]かな　棠郎

文月や[illegible]妻の味　夕山

[illegible]の面[illegible]文月かな　[illegible]

文月や[illegible]の香　古[illegible]

[illegible]別[illegible]文月の夕くれ　[illegible]流

文月を[illegible]　[illegible]

菊酒
草紅葉 八十一
椎実
杤実
籾丁
新蕎麦
柚味噌
秋名残 八十七
末枯
柿紅葉 八十二
落栗
山茱萸 八十三
今年米
新酒
秋暮
末秋
柿
柞紅葉
草実
烏瓜
刈田
酴醾釃 八十四
行秋 八十五
冬近
紅葉 八十
柚
柘榴
梅嫌
落穂
濁酒
九月尽 八十六
秋題不知

立秋

文月や木の実こゝろ仏の折　寒嘯
蓑井の傍に秋立垣根かな　雨様
何となく秋のおとづれ嵯峨山ぶき　如水
棟上の祝儀に秋の見られけり　仝
蟋蟀や露ふき鮮き蜂の声　百寿
秋きぬや鍛冶の音も所を変　守香
秋の立修行桃が郷しく草の蔓　杏園
秋立て秋来ぬ物や柿の花　文海
蛛の糸し揺る露や濱の家　艶琴
秋立や蜩の結手の種袋　相宜
秋は佳き声も衣や露の出崎　乙堯

秋きぬと秋も言葉ぞ立秋ね　霧笠
秋くるや日の入風に雲の曲川　岩董
秋立や桂の葉末を秋を見　椿海
蜩に露で秋立ち旅の行れ　路水
蛛立つ露の露ぞ形の下がれ　九徳
秋くると何にも露は花露見え　嵩堯
昔人の世の秋立山の岩秋　易年
中空に朱の糸樹や秋の庭　日渕
蛛の糸や露を傍の傍傍　史子
藻の色のうねりて秋の立　菜静
秋立や路に雲露積波の草　桂丸

今朝秋

きり雨や垣根の木かけに秋の立　東京　青鸞
今朝ゝらぬ秋のきてゐる庵かな　むさ雄
峰ゝみや米を零さぬ物ゝ集　二丘
きた秋の蜂あ候し川れ多り　鷗湖
今朝来て秋や木槭に見ゆる風　松舎
五月雨に味の備ゝりすゝきの秋　奇岩
寄らふ浦梯も古ゝ見えけさの秋　四明
松原の古うる見え今朝の蜂　山雄
初鳥の桜ゝく吹ふやけさの秋　夕山
井戸端の古花濡らりけるの蜂　以成
菊の嬉てく夕日のゝ秋と見え覧　文来

稲かる物にも見出してけさの秋　山雄
壇をもち絹の葉る知しきさの梅　桐園
ほゝる上に米を零々す今朝の秋　素老
華をとて雲にも寄けさの秋　松永
稲まで家に硯持出んけさの秋　二丘
涼しさや風にも見ゆるけさの秋　雄嶺
芋の葉や雫も添ぬ今朝の梅　樵海
小庭へ六ふし初たねよけさの秋　幻芝
有人の稲を枝も合たけさの秋　雞園
捨人ありと初子の育ぬる秋　古翠
業当の常に出来りけさの秋　素考

初秋

銀屏に鶴の声やけさの秋　涼谷
待ぬ人の来るも床しけさの秋　布席
縄一ッ端のたるみけさの秋　素静
俤頭に残しけりくたれ秋　桐宜
きのふの秋の気の身や梢の雨　四明
初鐘や夕紀よ声するの夜嵐　千輅
きのふ秋や社寺陰々暮伏見船　素光
初秋や笹の露ちる枕の着　春堂
今朝秋や網毎くるはあまの子　芦雪
初秋やよんべの雨の滴りと　文斎
入江に秋の立しまる光かな　稲翁

残暑

初秋や百舌の打せる草の中　東京　春鳧
きのふ様や浮かかる水の動きよ　涼谷
一竿の戸の残る暑さ哉　謙平
見てもへても秋の暑さを旅し哉　キ山
苗木の嗅うつと残暑かな　白起
生垣を離も菜かる残暑哉　禾介
松のそよぎ大きく残る残暑哉　川長
暑さもへりてはけさてく残暑かな　越後　波丈
柱打し小松に残る暑かな　陶烱
瘦の蓋嗅げ残暑哉　芍薙
栗の穂の風にも残る暑さかな　雄嶺

秋蜩

初嵐

第一木に鳴る是や蜩の声　扇女

ころ／＼の雨に鳴る是や蜩哉　鼎湖

夙暮の折／＼聴なる蜩哉　仝

大空の一巡通る蜩哉　菁孫

三日月を以てなく鳴ける蜩哉　一貝

庭中に木の様に鳴る是の聴　巣平

堅田の秋の云ひて鳴く蜩の声　椿海

妹の顔に露て起てかな絶えまに　一甫

第彼

其まゝて雲月にや初嵐　常弘

ふと来るも志ある形かな初嵐　大呂

風は来て耳や芋畑の初嵐　棋海

冷

初月

稲妻

下結ふけの濱裏門や初あらし　何丹

冷なる寒の薄や雲の空　庭南

初月や尾花青なる影もなし　古川

穂薄に小雨降る夜初月哉　文里

初月や俤に梅を思し空　竹岫

萩の葉の露も揺へし初月哉　蕉廬

来る月に露寒く濠の月かな　篠山

初月や二見を嫁の行衛　雛周

初月や遊の上葉の落て　漆谷

稲妻や盃の燈に影落し　夕山

以前の夢や波寄の宮の角　苛谷

稲妻にむかれもするか茄子の種　山雄
いなつまの揺る来ては庵り哉　英竹
いなつまや松の木枝くぬ家ともし　文里
稲妻や斧出所の汐かしら　甫山
稲妻に捨てゝ舟に流れ行　石龍
いなつまや将稲貫ふ舟より　常陸 丢子
稲光や竹も淋し北の海　了鹿人
稲妻の新しく流るゝ大河哉　素丸
いなつまや藪の中の杭二本　洗丈
いなつまれかゝるや佃島　鯱乙
稲妻や蕎をく藁の雨雫　古亭

稲妻や松の夕出して芋畑　玹棠
いなつまや見えるぬ人の影かな　葬母
いなつまや二人揺ひし舟構ふ　翁よ女
稲妻や通りぬけける八重桜　嵐斎
稲妻や板に見えける長田畑　庚年
いなつまや屋根を挟んて二変　史子
稲妻に憶るゝや藪も橋　田蓑
いなつまに終夜して木揺れ　月呪
稲妻や芦根の抹の手めて　仝
稲妻のたつく軒や枯柳の先　左表
いなつまや浮雲を汐にたつ居る　謝堂

花火

稲妻やつゐに葎の宿の宵　涼谷

七耀の翔先く向くや花火哉　芦帆

雲に竹に呑喰せるや花火舟　禾木

静なる流れ為せる花火かな　丁志

との山も低くなりける花火哉　二丘

竹の露に梅のうつる花火かれ　知機

人声の夜に広まる花火哉　松帝

茶色と一家に成る花火哉　松秀

七夕

芋に画賛家集拾ふ菜や的　不曲

七夕や機ゆくとまぶ舞佳　夕以

七夕に伴ひ来たる寝覚哉　粗年

七夕の星夜の末く知もし　川光

七夕に大空に一枝の挿し花　寿女

七夕や夜の波寄せ枝の影　松葉

七夕やまだ待つ姿ぬ宵の内　甘丈

七夕の露にあく傍る葎かな　赤鹿

七夕や明るいつよ子供哉　魁葉

星今宵

星今宵梶の葉より讃し　芝葉

義の字も露ならぬ星今宵　抱琴

雨の為か軒も嬉しや星の上　久蔵

裡の庵にもけ人声や星今宵　菜静

星合

とも星も離れぬところ光哉　一舟

星迎

星合や婦のゝ舟と橋　其磨
わし合や不二と筑波の西まで　如仙
星逢の飛鷲ぬひ絹かな　荷乙
後妻の見てあるや星の哥　而考
老星に人の恋しむ夜もなり　磐浦
いろは書子ゝも待兼し星の妻　芸巽
常なきに船も出来たり星祭　如旭
星の雨夜にふりぬ早あれ　槙洲
宋級ゝのまゝ見ぬ夜や星一夜　何芳
岩木樵星に入日や星迎　文溪
庭の竹に撃うるや星迎　文光

星別

わかれゆく庵ぬ扉や明星　素子
保燭城や星も名残の八日白　篆種

天の川

星に夜も引渡りて銀河　雲也
人恋しと離らるゝや天の川　壮貲
大町の雲たて変りて天の川　眉蕉
松に付て廻る気で天の川　文光
月に向て絹はぬれや天の川　羽白
家しる星と流れ挑し銀河　笑盧
古歌の名のごと涼しく天の川　不曲
霧の縁橋子に発て天の川　長亮
山の根の新たな秋も銀河　菁蕗

雛の瀬すゝ流るゝや銀河　葎母
天の川寐ざめて聴て小床しき　仝
菜種殻の枯蔀乱れや天の川　多よ女
片端ら手月も入る天の川　大梅
天の川先見えして遠入りけり　芦月
数作る峰の稜より出る銀河　乙負
青の花咲て来し天の川　一貝
須磨渡しの風さ天の川　一楼
松井の梢よりかゝる銀河　一舟
晴わたる空の末や天の川　松道
峠一つ越て見も渡して天の川　芽岩

貸小袖

去嫁て見る果中し銀河　吟霞
松風に浮出して天の川　逢涛
ゆふくれの月の影や天の川　涼谷
天の川手も届かぬ星の数　仝
貸ものや星に借す貸小袖哉　葉瑚
やさしさ衣も其侭貸小袖　栗笑
揃ひ時代物も貸小袖　多よ女

立琴

立並て流れて立る琴の音　臼人

梶葉

書そめて梶の葉をなほ葉かな　芝葉
梶の葉の葉末の秋の水　文兎
　一具

盆

魂奠

棚の末に鏡ひかるや銭哉　吉つ女

行燈を掛くるや盆の宵　正令

盆ころの星澤山なり花ひ也　赤葉

古く盆しる者とも尊枕　雁嶺

家悪しや山のふもと盆の家　吟霞

親人の居間を出るや魂奠　札月

玉祭乗も乳枕山に泊り　蔦和

行燈に捺まる付て魂祭　兼佐 一甫

魂奠混雑するや家之　西阜

大寺の玉祭なり焼一人　仝

機足し母の菖蒲や魂奠　古翠

生身魂

魂祭佛の稚月出かな花　如仙

玉祭巴のちしを吹寄り　松翁

祭中々引とつくや玉祭　乙負

玉葉秋の郷にほとり合哉　貞只

稀の丈の高なね羽織や魂祭　丰蘸

義拭や名照も玉ある　の傳之

二親の二身揃ふや生身魂　松燃

わすれずよ蓮の花なる生身魂　素芯

行よね両の傳之生身魂　易足

写まま両笑生身玉　涼岩

法人の草履踏ひ庵笆　蕎菴

衝突入

迎火

魂棚

迎火に燐の色まで見へにけり　鷺水

迎火や数の敷をてらしけり　蘭乙

迎火や時々うつる山の上　荒古

魂棚に並べてはなし事たらず　千梅

玉棚や粟稗さへに風の夜　松月

魂棚の明り先立つ虫の声　祖郊

有世菜承玉棚のかつら哉　雁嶺

玉棚にをみなへしの文の絶り哉　芦帆

魂棚に蜂の巣まつり夕照ぬ　孟子

玉棚や恋しき霧の香を垂き　桂程

魂棚や燈明に風照しけり　吟霞

棚経

燈籠

棚経によく泥見せけり雲の下　葉路

人影も共に属し燈籠哉　千梅

背合せ家々の灯や盆燈籠　竹秀

抱下し子の嬉しがる灯かげ　玄子

物知らで妻々見る燈籠哉　松和

隠居の軒にも釣ん燈籠哉　巨臺

燈籠の油はまたん海ぶさ　半丈

津山にはるか月出て灯流れ　八朗

燈籠や近く来る舟の音　太貫

燈籠や燈さへ暗る軒先　月岷

物々に庭のも淋ける燈籠　魅景

切籠
瓜馬
蓮飯

終にする物の始や玉まつり　一可律
掛くの玉寄けく迄とうる哉　芦道
森汐て見て拾つの燈籠哉　巨臺
燈籠や蓮ゐる狩野も記ん　久藏
萩織に互家のうかるとう行て　荷堂
飛鳥御所の燈籠焼籠哉　惟孚
捨袖に切子の出みる哀かな　田筆
瓜の背のけて形する法儀哉　兵湖
瓜の背るてに上する手綱哉　賞　五鳳
折傳けに坊乾けん蓮の飯　布廣
蓮の飯や味ひ付合乾きけん　二丘

施餓鬼
送火
墓参
盆月

不稲の香も葦蘆の哀や施餓鬼棚　民枝
送り火や母も肩たれ庭の先　雛用
送り火を夜の見て拾ふ細哉　斗米
内蔵の塀の見ても来るや墓参　友之
夜桜にまつる華や墓参　玄子
人の手の絹けたり墓参　庭雨
上下て哀つ来るや墓の参　二丘
墓参縁ある人々家あり記　樸海
母親の手綱積や墓参　吟露
粘集なふ人の夜露や盆の月　稲秀
雨庭の廣くも盆の月　五鳳

盆の月昼ひるからしまし人の来　夕山
行かくの手も旅て盆の月　道雄
乞食の袂借物もや盆の月　東止
むつましき中をそろへや盆の月　松舎
枝す柄を流して出る盆のこと　文鵬
住吉の貸ちかくれん盆の月　芋井
晴そこの橋影しや盆の月　一幸
葛飾は淋しく更て盆の月　篠山
見送りて挨拶志ぐる盆のこと　為安
おもしろしと菴に来る秋や盆のこと　雉啄
盆の月負てと庭の花見落　一蕙

躍

鉢ならぬ月の稚おどりや盆のこと　十箱
掃除して若衆盆の月　素芯
大事かりしまかへる盆の月　布聲
谷住人菊の中なる盆の事　一巣
笛彼
燗鍋も又客の使ひ盆の月　涼谷
秋も世を思ふ物の踊り哉　素芯
太鼓人の声も踊の唄り哉　九峴
裏町を枝橋の踊をさらし哉　二丘
編笠も揺りつ盆さかり　古翠
上下へ散って揃ふるをどり哉　梭海
通りして気も引返る踊哉　黄花

たのしさや踊るも家の流れ　大笘
葱さへも縮みて待ちてとりけり　翊堂
揃ふ手も比貧のこゝろ踊りかな　菅兄
踊りかな拍子のこゝろ残りけり　羅乙
庭松に揃へて寄る踊かな　夕山
をとりみも名をも見比べ所かな　素石
稲も家く処を取るをとりけり　友之
降る雨も降るも忘れ踊かな　仝
取手紙面疲れ寄るをとりかな　玄子
伽藍の手取りける踊かな　尤雪
をとりけり時雨さへ寄るをとりかな　文鬼

一艘に小舟まつむをとりかな　陸奥 南山
踊るとは見そめぬ人のをとりかな　下総 雨竹
兄貧の浮山まくをとりけり　其帯
疱瘡の疵蕪しや盆踊　兀笋
三年忘れし家の踊に来りけり　和久
庫裡に寝て引越して踊かな　一洞
踊子の香に入る流れかな　万里
古き乳母の待つ踊かな　古寧
代株に気づく待つをとりかな　氷谷
田毎に出てをとりしも踊かな　巻橋
連や踊の古戦場の月　桂丸

忘扇

二百十日

乳のむもの一人ねぶる踊かな　桂葉

出しぬけに踊に出るや姫御前　涼谷

踊せよとて押出されける嫁かな　文鯨

相撲取の踊る新らしく月夜かな　陸奥　甫山

留守の戸に忘れて来し扇かな　月下

忘れける扇の風くれけるかな　芝葉

腰に挿て探りあてたる扇かな　名古　一甫

捨扇何方の家に拾はれし　尤来

比ころは気も如く二百十日かな　二丘

稲舟の出ても川二百十日かな　川長

元結も堅結二百十日かな　羽前　二了

相撲

情の事に二万千日入りける相撲　笑然

二万千日月の名残るなりし角觝　正全

眺めしく土俵に見せる角力かな　業郷

赤ん坊ハ嬉しく見る相撲かな　雁之

兄弟なる角力の美しき角力かな　一霜

外科の来ても見えし相撲哉　久山

霰る霰を頭にしてるや角力哉　素夏

相撲の羽織とられる相撲かな　左川

女児の面白ろうや下手相撲　友之

草相撲土俵に飾る入か一つ哉　梅堂

当りしやうるの上覧角力哉　楽水

土俵入
露

露分ハ庵程らう出るや土俵入　去子
手まくら目物よ花に露の玉　荷乙
程まて待て露待る露の夕日影　古佳
我露や露を手拭の藍ころも　棠郎
揪挽て出ひ入る夕暮露の中　岐久女
去る露を露のまゝく文木の葉　文淵
夕露や浴衣て出る短冊かな　白趣
盤消ゆ白ゆらて氣たつ露の床　一之
秋の野にちらされぬ露の玉　縁胖
枯木にも露の降りて我中にす　夕山
強しまゝしくも無て草の露　木因

垂露に星の影りの桃谷哉　芝月
雄の止て程なし庭の露　去子
明る光ゆらしと露の影も露　二丘
白露や子死の葉の徐けれ　右宜
露吹て入やけ更さ宿の那　一甫
燃の火果の露さまさ白ふさへに急　寛宝
庵維にも錦う動ゆり露の玉　去こ
ちら露の果ちてよき井ること　仝
白露や草庵るとハ咋らしも　鶯笠
草の戸や去近る竹の露の声　露竹
虫露に挑らし纏く夕和哉　乐水

露時雨

崑蒻の花咲くほとり霧雨 学井

霧晴て松に雄々しく乃を　昭省

新霧や波間に松の墓の音　杜年

立霧の裏の水くて月の霧　大貴

明るも又霧の立るや夜の秋　布席

無ひよし一足出ても霧の中　史子

竹に出たる霧大粒に降りぬ　鳥湖

豆腐の二方持ち出ぬ霧の麓　氷谷

霧白く立つくて来し艸の上　井悠

立霧やとかくて霧や人烟霧　每安

清くくも霧よりも雨ならぬ霧　壷半

霧の杉やそのうへの月光り　光佳

立よりも蔭なき霧の光かな　古宰

折をりて炎光に霧の光かな　素池

白霧や月に立霧に移り行　貞雄

蓮生や世にも忘れぬ霧の塊　不曲

忘られ霧の立や種の急ぎ叢　松布

何ものも霧に現じ丈草かな　有ふ

草の戸や墨ならぬ霧の立　未来

木立くと霧ゆ霧や梢を打　篠底

陸もの何も出ぬ霧立ぬ　篠山

秋なる物の霊もなし霧の中　雄嶺

露霜

霧

竿の戸や時雨さそゝる露明り　雉周
露霜や荒れ菊の残る庭松の竿　二丘
露霜の早うたりける河原哉　一具
山里や霧の晴間を摸しけり　四兼
舟暗く霧に山崎はなれけり　棠郎
深霧や何を閉る二階の戸　元琴
西窓に見えし木槿おもし霧物柔　凍谷
朝霧や梢て見え行山寺　朱水
花もなく人声のある秋の露　松素
幣串の庵捨てゝ秋の風　蘋水
写る市の中をはなれて秋の風　其石

秋風

蝶の身のたゝかれ中も風の端や　千輅
鶉鳴かい一声もなし秋の風　及二
一群に雉も友も秋の風　道雄
撫子の花に元家に秋の風　桐宜
蓍茎や寂寞に秋の風狭く　仝
蝶やつたの籬の鳥にぞ付く　不着
戸明けて涼しい蝶の風　笠佐 一甫
あちこちと秋風吹や花の上　素路
秋風や棵に命を並べけり　名和
旅姫に秋風吹ぬ旅の寝　五岷
行きの上に吹や蝶の風　竿井

颯風の吹れ道する形質捨ぬ　田華
菜留箸さへ晴れし秋の風　大棋
米搗の身軽く來や秋の風　仝
世をうかれ見て物見捨ぬ秋の風　云々
榛の木わけて代口未し秋の風　田華
颯んや列居る味き旅の汁　李朗
吹の足の先も静なり秋の風　越後 乙左
秋風の吹ても来し行婦人　耕雪
分前の際うこえるや秋の風　松和
十代の刀を添や白木の鞘　美文
人まつさき葎の露秋の風　蕉立

てらしとほ糸の照や秋の風　青池
江の上の鉢も清し秋の風　原谷
穴まくら戸口の外あきの風　羊山
颯風や泥に去る草虫のかけ　多よ女
葉蔵て礼拝し秋の風　琳葉
あき風や雛子勝つく葉の中　半丈
詩影うるも老ひ晴の行颯風　妹か
森ねむる雲の上や秋の風　蕉洲
曳舟の綱のゆるむや颯の風　羽前 山寿
神楽や来ぬ宴を照秋の風　桂程
颯風の乱れ吹てあり夕まし　迪照 一貝

蜻蛉や桶の檐に来て離り　鳥洲
蜻蛉や竿に来ては止まる集　丁方
出る月と入日見えけり秋の風　羽前 吟歩
はつ風の吹やおとらぬ後から　小圃
湖に舟流しし秋の風　南濤
蜻蛉や四つ手に来る木の杖　一蕙
秋風や山は変らぬ姿かな　布席
秋風や障子に洩れて木槿垣　仝
舟柳の一すぢ見えて秋の風　松秀
蜻蛉の泥に毎の影を結び見る　笑語
金堂の内に立る青や秋の風　桂葉

桐一葉

秋風に骨身に滲みて向ふ杖　香流
蜻蛉や浅き流れの柱　杜年
秋風や人の足跡消ぬる　白起
情かけて寄る竹吹くや蜻蛉の風　文鬼
あき風や松の葉もとに二里三里　芭角
葭簀更けて桐や雨戸を過る　井圃
矢来の吹きしまり桐一葉　風毛
桐一葉桐にかかるや小屋の屋根　文海
其の夜の静けさやちらり一つ　白起
立ちよる拠村や桐一葉　柳想
桐一葉落ちて夜の響の音　素兮

其儘に並べて見ゆる桐一ツ　芦月

落ちて後見出せし庭下一葉哉　玄子

萩ところる夕日寒く桐の一葉哉　二丘

生れ枝の先に残りし桐一葉　素之

多事にて雨の空に残る一葉哉　鶯笠

桐一葉落ちて其後葉の散る　楽水

打りて見し庭へ出て今年捨縄　五沼

大様の心を見るや桐一葉　光佳

鰡の目の見ゆるや桐一葉　波丈

揺ぐ枝桐の一葉や井の龍　鼎湖

桐の葉落ちて見たる梢かな　古樵

柳散

垣根やはと見し一葉見えて見る　青池

雲の間に見えて桐の葉とさ　市石

今の外にかの一葉哉　紅雄

落ちて道あり芦の葉や桐の先　蒿蓮

稲妻の後へ落ちる一葉哉　鼎湖

一葉飛ぶ柳の葉さへ見えて　雨汀

柳の枝に結びし柳葉の庵　龍来

柳ちるや白き船の流れ変　不曲

四一枚柳ちるや柳ちる　棠乎

柳ちる新や風に柳の　杏機

何の毛余寒に柳ちる　東止

木槿

旅人やとまりとまりも柳かな　雄嶺
松影や手の行く方の柳かな　桂九
垂るゝ露もこぼれぬ寄の之柳哉　禾水
嬉しさに打ちの出す世の中かな　李朗
丹椒も世に似て切木槿哉　幻篁
同じくの宿に居る花木槿　雨考
風呂の中も種蒔のする木槿哉　机月
先生の折る花しらる木槿哉　一露
行客の作にすきする木槿哉　夕山
菜畑く木と共にし木槿哉　鶯笠
咲くとするて渡の人木槿哉　桂海

常山花

朝皃

鶯所の卿や垣見白木槿　梅周
水縁の石ゆゑ来る木槿哉　佃丁
つれもなく散らぬ木槿かな　南如母
株遊子木槿ちらさぬ辻諸かな　原之
既にもう傷くかゝる木槿かな　荷堂
小刀の刃に落ちゝる木槿哉　巽洋
先ゆ打ち折らぬ人ありぬ白木槿　松秀
ともし咲く花山への寒き梢　雨考
朝皃や晴るを待って了る夜　夕山
葉や背も折らぬに後のへる　一之
朝皃に都もうし来るや山の風　桂海

今は渡る郷の渡り鳥夢ひとつ　斎左
蕣や雨にぬれても内に居れ　羽人
渡り鳥に翁菜忘れて鐘出づる　芭角
待よ咲ておの花蕣の手折たり　葛松
蕣や大きれ月を蔓の先　二晶
渡り鳥や端折て拂ふ燭の朶　愚本
ゆきき影や無色乳草の露　恕雲
朝鳥やちゝきく餅の波の音　篠山
渡り鳥の跡を追ふさて嘆き哉　雄積
暮ゆきさひ蕣織に咲く一輪　多よ女
蕣に旅人折りて物いはず　仝

渡り鳥や忘れ切たる茶の使　一之
蕣の明日も見らるゝ月夜哉　戴星
渡り鳥衣もしけり雨の暮　苔谷
蕣に翁かたみの笠の紐　芦帆
ゆふ鳥の羽音に暮て見ても見ず　亨雪
渡り鳥や称も来し菜の花　笠依 一甫
蕣や大月に五十の庭手元　仝
あさ鳥や時分の空の雁のあと　蚕濟
渡り鳥に影持せんとむら人数　松海
行る月蕣よりも明りの花　几写
渡り鳥の声ふる先はつ程に色　双二

郭公や鳴さへ律く庭の白　犬梅
蕣の花も雲のうへなり　久蔵
美しさ蕣植もけしまじき　貝谷
郭公や猫もしらぬ雛の傍　幻芝
明さ郭公挽杭舟明やしまし　二了
あさ顔や葉に咲くるむし一ツ　禾木
河原の蕣なかゝる出る哉　仝
郭公に鳥や郭公起さるゝ秋の肉　典人
郭公や見ずに山の氣　菁花
蕣の謂の嵯峨も明る色　貝谷
待たぬ郭公朝家し哉　一具

蕣や葉もいらずに又一ツ　仝
咲けり郭公作りて屋の　葉新
郭公の声に暮ぬ白い哉　一蕙
のさ秋や兎もしらず雨中なる色　石
蓋に帆ただに余所に　布席
郭公や音も実に宿の様　大貴
郭公や机の上の花の宿の色　古橋
蕣の露に下も露もてり　扇花
郭公の鳴り内に出て様なれ　白桂
蕣に急がせて殊なり童第　雨安
郭公や鳴子人の喜なり哉　桂丸

蘭

移香や隣家は八十の老　弦化

袖もの移香ちらし花の色　赤蓮

移香や芽仕蘭採に山作様　棠平

蘭の香や風の寄る家の秋　文来

移香さく匂ふ札も其立まま　田第

葉の香や探し折出る水の流　如水

葉の香や出ぬから這入る湯の宿　文和

葉の香よ只露ある月夜かな　松和

藤袴

折ぬ手に露く匂ひや藤袴　東京　桂秀

桔梗

河よ空頻りなる桔梗かな　松亭

白露に色と見ゆる桔梗かな　鶯遊

芙蓉

秋海棠

女郎花

河の出来て此辺桔梗かな　棋海

極らぬ色桔梗出る桔梗かな　二了

子をもつ人折らぬ宿の芙蓉哉　米文

露寒き夕日さへ秋海棠　鶯莪

曇る日を霊の如くぬ女郎花　芳井

其中でも露の曳よしめし花　三桃

女郎花にも折ゝ縁しけり　雄積

夕暮や折りよ飛出しためし花　玉和人

夕顔のけふは曲るや女郎花　鶯蘿

折ても後見家らしめし花　阿弓

折捨て咲あせて咲女郎花　棋海

秋くさの朱に無き色めく哉　芦月
去年とは違ふて又折ぞ遠し　一貝
め々花手折とて菊人様の振子　布席
薄様よ今様しきめら哉　謝堂
菖蒲や薦の中ゝの音遠し　半丈
折くせてそ笑く来や女良花　うね上
山に咲く名よりさしくめく哉　杏園
志をつけの女人男よき遠し　丞夕
枝くもかたちく咲やめく花　有一
嗽擣や虫取の枝先めら哉　亭鳥
た々遠し古原に新く寄る気色　葉静

鼠尾草

沙先や折し数々めら哉　涼谷
兄妹は常に女郎花　多よ女
降雨のよく流くりめく哉　芳谷
鼠尾草や取ともなく流くれ　二丘
みなかたし二私さる上の竹　荒右
鼠尾草を帰りく男る女かれ　座雨

野菊

枝くも花の痩る野菊哉　竹林
吹きかせて咲く斗て野菊哉　友之
嫁に出る花ん野菊の一ツ襟　素足
咲く咲て花のつく野菊哉　梅雪
猪負の境に居らぬ野菊哉　野湖

萩叢し行やうき葉の下見萩　友之

庭掃ハ萩澗かりけり花の花　道雄

古株に手とも萩の花の集哉　蜀緑

萩に手述襟ま下結ぶ萩の露　下総　一甫

ちるらして流れまでり萩の花　笠彼　一甫

かりくの渡生形ふや萩の露　仝

萩出ん萩や繰上出かる秋　稲翁

折られ萩まとへるや分けり　素芯

萩へ出て萩へ西出て触哉　節之

雨の萩あ小松へ及らし　玉和久

仮名とよめ志るる尾や萩の花　古摂

萩

宿よろしといへハ首ふる萩の花哉　吟鹿

勝り出て身振ふ犬や萩の花　田華

牛の尾に打たれて萩や萩の花　芳谷

萩の花日影暑るのよろ移り庵　秀筆

葉や先に露に萩の花盛ね　文游

蝶ふれて露の展ろふや萩の花　杏挙

風先よ分て戻るく拄萩は　清水

走りの萩や帯おろく月の出る　栗笑

手をかけて月夜は志らず垣の萩　文里

萩んまい行る手折るや萩の花　祖年

萩らそやす大きなるよくハ萩なし　芳谷

萩ちりて末あらく淋しき夕曇　布席
露の轄は主丈婦やこぼれ萩　鳥湖
萩ちるやちよと行りし墓の前　史子
紅の指かゝる茶摘主得や萩の花　桂秀
岸の萩ちるとも志らで流れけり　大貫
萩の花ちるや白露紅織　蘇平
ともすれば志て庭すゞや萩の花　松秀
古庭も人にしられて萩の花　幻芝
雲拂ふ萩の影も一色　蘇平
咲初て花初て萩の露の秋　蓬傍
起て寝よ見よ萩の花　桂菁女

萩

挑灯て見ありく萩の宵の秋　可儔
またゝ人の通ひぬ作や秋の萩　壮貫
咲のまゝ志て分る孫萩の花　政秀女
家の里しづかに萩の咲る里　文来
小車の入日乱る萩の末　吟霞
志ら萩や露のこぼるゝ秋の秋　又乃
萬も幹も萩とゝめや晴の萩　文来
庭先や四五本のちる萩の声　永谷
旅人のかゝるゝや萩の声　雲也
初かしの花の萩の声　湖雀
折れてたゝまぬ萩や萩の声　其笑

芒

萩はや妹もまぬ河原　正令

風先にまかりし萩の芒　岩城 一甫

近よれば今のし萩花芒かな　雛周

蜻蛉まつ人見ゆるや萩の声　子松

白露の手段なりけるすゝきかな　棠郎

芋の戸の影の暑なる芒かな　雪也

揺すれて花や芒花二三つ　休圃

花先の自然と逃るゝ芒かな　粟笑

神木の中の西に生ゆる芒かな　一之

吹あへぬ芒なの上に去りし哉　素有

動きはひとつ鈎なれてゆくすゝき哉　柳美

とふ度月はかりかかる芒哉　仝

背戸口や芒にかくる宵の月　戴星

紫の戸にすゝきの伝へる秋の哉　梅雪

駕の蓮に寄りても秋よく芒哉　二丘

芹上に前夜も露く芒かな　雀堂

更まするや芒の宿の寒かかり　鶯笠

夕やけの空に揺れし芒かな　稚鶴

積芒に揺るも秋よし気色哉　棲海

折へ白帆のうつる芒かな　孔丞

堤芒や吹しまれる人の歎　掃花

芒にも衣や小雨の夏の宿　積翠

鶉鳴け遠さとの野に径 高山
押わけて見れハ草ある鶉かな 大梅
静かなる鶉にかなる鶉の声 鴎湖
栗鼠に夜ハ谷して鶉の角 丁也
さびしさや風のきつりす鶉かな 月况
出ぬけ道ハ斗ての宿屋鶉の床 亀与女
幾つ温泉の夜ましくさる芒かな 秋翁丸
夕暮や尾の動かん芒の山 木直
海の姉に遊ひ揃ふて鶉の床 嵐雨
一村の暮色新る芒 苅舞 一方津之
鶉籠羊の輔たちきぬ遊さかな 一飛

秋

花芒

まんか芒

小車

植さく枝や野の木の風かな 第位 一甫
焼筏の色紙かけりきりて 双二
吹出ん芒の立さや芒 庚年
つれさへつよさわすや芒さよ 菲ノ舟
茶鶉凡さ忘れぬ嘴り舞 月下
芋と薄日乾すしかさや鶉 半山
三日月をまんと出るり鶉 卅秋
一村の枯れ侍きや花芒 卅里
帆影さん風そよ吹の鶉かな 蓼雨
片影さまん木揃ふる芒かな 難周
小車の遊る二日月 第位 雨雫

蓼花

暮るる日や溝に角に蓼の秋　芦丹

ろ汲みに町のとくとく蓼の花　前蔓

京中に幸きぬ日や蓼の花　一水

人住まぬ僻もみえて蓼の花　宗屯

柾州なる子に踏まれて蓼の花　鳥湖

叢仕切りる上宿やくくの秋　巣鶴

魚捕りて通る堀に蓼の秋　文斎

きへり出る邑の海辺や草の花　為よ女

邑布の日和に冴し州の秋　東月

同利安まで袂に入りて草の花　正令

草の花折りかかれ折も流し　鶯笠

草花

水引

稲花

田の畔く咲揃ひて草の花　雄稹

舟下まで先晴しぬ秋草の花　笹波　一甫

流しろく発見し底の州の花　康年

草花や秋まで花ぬ泊し窓の色　江二

伺香うち所近くし草の花　塚谷

州の秋たうそみそうし月ぬ女　ぬ蓬

露くの枝ひ変や草の花　量山

水引の花や抜けに秋の露　麦汲

仮陳の終児ぬ宿や秋の秋　汀花

稲の秋時代見うして咲くの露　眉蕉

華の年の六や以秋の葉　一陽

蓮実飛
瓢

河に来て見れば廿六夜を稲の花　川長

日の入や稲の花見に出る主　楽鳥

掌に上てころころし早稲の花　文仙

札所のりんかん一群稲の花　二丁

法衣の裾に紙を付ん稲の花　一蕙

水に手洗ふ姥川や稲の花　丁知

法御前の扇にのせつ早稲の花　高女

蓮の実の飛て学ぶ女　蓼雨

出るたび役付の出る瓢かな　二丘

時を待ちつゝ種瓢　泉暴

葉を打の端にちるかな　蓮亭

西風

早稲

墓に見し河ずれ姥かんしかな　魯得

手まめの宝叶や大瓢　友之

米生の来る瓢や義の照　正令

駒繋を運んで大瓢かな　求秀

一つ家の低く干しぬ種瓢　有一

種ふくらむ吹つけ雨の空かな　鶴巣

照らしや西風白帆の畑構　学井

出でけ出てくる鷺が飛ぶかな　一秀

辻堂の稲穂に切るる西かな　雅年

三日月光に西風かな　礼月

早稲の香に出る葉の日影かな　丟子

落し水

早稲の香にかゝる出立や人心　西乃

初も外やまゝ墓参の住　素子

早稲の香や露重ゝ出る瀬の月　千梧

早稲の香におふ金の般若寺　正令

瀬戸川や早稲に離るゝ秋の音　風好

あら豆の澤にかゝる籬かな　萬蘿

落しやるも終ふしても山田の水　希席

様々の音や香より落し水　雲遊

猫實や海見井ま落し水　杉月

月星の影さし落し水　蘿面

岸くゝいやま落しのるまの音　常陸　杉外

荒海に落し出る秋の田徒らかな　杉月

旅人の今に似て落し水　露翠

岩が岩に落しても也秋の音　陶洞

切落し山田の水や見新り　為女

人も歩す月に來や落し水　一貝

二三反に切て落しや山田水　英山

老家経家や庭へもかゝる落し水　巨童

戸一ツ落して暮るゝかな　五風

岸ぬ杉も落し水　常陸　甫山

紛るゝ落し　蘆通　双二

殘蚊

秋の蚊の人にすがるや昼のうち　秀雲

秋の蚊の来て懐へ這入けり　雁堂
残る蚊の声をかしけや提ぎれ　夢雨
のこる蚊や噎て啼る夜の月　雨芳
残る蚊の主附て飛る柱かな　芳蘿

秋蝶

掃寄し塵の下より秋の蝶　井来
停繞く舟の夕日や秋の蝶　壮貫
来るとも高く広るとも高く秋の蝶　甫山
宮一つ来舞ハ狂ひ凡秋の蝶　友之
秋の蝶飛や尺に泊　文光
風邪の月へ舞ふ秋の蝶　乙尭
掌へ這ひよりて見けり蝶の蝶　宗飛

さかさ用ひし草子泊て秋の蝶　千之

秋蟬

蟬の脱ぬるに高まる身の色かな　自露

蜩

蜩や釈秋ぬ子の花案じ　稲香
蜩や萬生居ても日ハぬ田舎寺　其飛
新月や括ハさ侘して腰て停　里竹
蜩や林の霊ふる寺の上　雁堂
蜩やまろき山の雲死飯時分　黄谷
畄仮
蜩や露さまたげぬ古寺の門　一甫
新月して清かて廻るや掃除寄　菜瓶
蜩やあらしにとて上る西　老陸

秋螢

海中ハ座にも死秋の蛍かな　其摩

蜻蛉

秋の空松の上より来てつゞき　此旭
強風に向ふて入り蜻蛉哉　眉蕉
夕暮の芦荻に絡くとんぼかな　昭眉
蜻蛉の止りし心や竹の端之　玉葉
蜻蛉や曲ると見えし石の先　月齋
とんぼうも赤い羽とまりけり　下総 一甫
蜻蛉の羽もちらす也三上山　素右
とんぼうや向ふ流れの渡り耕地　塚谷
蜻蛉や尻新出来し人通　広年
振る笠に戻りしとんぼかな　羽人
薹の葉の落て来る秋の風　文光

虫

草離れし人も飛ぶ哉虫の羽　小圃
藻草に溺れ飛ぶ虫の声　竹雪
鼻先に飛付く虫の音かな　只岑
日の暮に虫集まる古橋かな　玄卆
懐に入りてふんばる虫一の秀　定香
雨傘や虫の上る縫机　暁雪
虫鳴くや尻振し料理場　竹雪
壁の下館も路添ひ畑や虫の声　雲也
一声に秋を動かすや虫の声　和泉
松の葉に揺らるゝや虫の声　雄美
虫の音にまじる芦間の夢哉　粟葉

いろ／＼の虫も一つに啼る松虫　只友
虫啼やおもひ／＼と月の秋　竹奚
噓ても便りて醒る枕虫の声　古川
虫の啼口あいてすか清る夕　稲者
虫啼や花の咲たる垣の隅　竹妹
星の夜を里啼けぬ虫の声　芦月
冷あふと松の露や虫の声　楽三
松風の併に汐るや虫の声　春女
虫啼や緑立ほ須の屋根　桐宜
一しきり精出し虫の声　高吉
風の夕に苗の月や虫の声　梅室

鳴や虫声の去りと経いと　梅周
蘇の虫声のよき程夜すり　伎丈
手寄るや虫よりは寝ぬ枕哉　妹和
更る程に消て廻るや七の声　其斎
うたた寝に冷えて来る虫の声　林布
糧さへ残り肉も体中に虫の声　石枯
一しきり来る夜や虫の声　二了
虫の音に引出さるるや船の旅　竹齊
虫啼や油たまるる松蕗　多よ女
松茸や夜の月や虫の声　雅巣
虫啼や積る畑をの　月晲

蓑虫鳴

鈴虫

茶立虫

露の戸の明は止て虫乳やり　木架

虫鳴や草の上行夕日影　芦崖

人去て来や虫鳴秋の道　棣々

虫鳴や岸ともよらぬ浪を嫌　一甫

大路も一秋所や虫の声　素芯

籬の虫敲つ程よ夜明あり　文鵬

蓑虫も吹るゝ風に仏かな　蒿莚

その声やみの変て今なる声々　雁臺

鈴虫よ夜は寝て待つ横枕　笑語

さゝ虫や此為逢て石燈籠　凌鳥

明くつとも時弟も茶立虫　久藏

竈馬

蟷螂

[illegible]出鷹

鳴子

秋の滅るは防虫やの落葉かな　桐家

蘇苫の庭をと飛出たり子かな　玄子

一寸来て物云ひたけ哉みかな　二丘

来声も得度猿立風の蟷螂哉　古琴

きらぬ気の蟷螂も皆秋の声　鳥湖

樹るの餌をも得て秋の月落し　光陸 尺薬

挨拶を仕ならしも鵙鳴ば　尤来

松茸の営も兼るや鳴子引　古琴

露の入引まる畑の鳴子かな　文鵬

鳴子引音もして出し夫草鞋　翠浦

柿の木も一つの縄の鳴子かな　惟草

鳴竿
引板

引切て伽藍住る鳴子哉　雪山
鳴らして松する人の鳴子かな　一峰之
小田山田驚て出る鳴子かな　千杉
掃る内にかゝはりく鳴子哉　謝堂
あらりよ来て狸と山の鳴子哉　一之
念仏も忘れて先へ鳴子哉　思文
川に添て行く驚る声もなし　東止
淋しさよ餘所の鳴子も戻て後　一陽
里くの夜霧見る気鳴子哉　素太
鳴竿や待る年立里往安し　宗芰
引板鳴て少し止み芋茎の泣　久蔵

案山子

糊おとて崩しよかゝるかゝし哉　亀得
案山子より低くて小家の並びかな　角之
雨露よ住る身のいかしかな　甫石
人のふりして手に廣げける案山子　芦月
肯ふ立て案山子とは何る夕かな　鶯笠
犬の気乳息ほし瞞くかゝし哉　素来
家案山子尻ぬれて居と起ゝり　鴎湖
年中と案山子ね去りし案山子哉　之楽よ
雨るゝ出ぬ蝙蝠の出るかゝし哉　二竹
田より細りかゝしも秋も夕暮る　芦堂
来る人の向けるかゝし哉　雄鎮

秋之部中

八月

八月や木を伐て居よしの山　巨壹

八朔

八朔や座屋にかゝる鍬の鍋　如仙

八朔や綿摘へ先辞宜た親御　二竹

八朔や田雀も寄りて庭る　永岑

八朔や扇子ひらけ見え白ひ　震峯

八朔や声かゝる稲の波　隨胴

八朔の風子名も特田面の秋　棠乎

八朔見風も尻葛[illegible]　雨芽

田面の日

八朔やきのふ植たる塚の松　素丸

八朔や尾花もふさと白の雑　丁岑

八朔の湯場ぞ上る座敷哉　為上女

湯奥へも廻る稲穂や田面の日　古翠

仲秋

仲秋や露の落るも一夜あり　素鴻

長夜

長き夜の障子に傾くけふの障　霞泉

雛ならで又夜の長さの形　福堂

湯治人の噺て候て夜長哉　左雲

長き夜を読中ねむし座付衆　下総 文兎

長き夜や覚えて蔓の音高く　一甫

永き夜の明て淋しき硯かな　丈二

秋寒

粘強うなつて旅の衣かな　二酒

波の音も寒き夜毎の霰哉　夢雨

秋寒し何ぞ見るなく塔の松　棠郎

秋寒の山林に干さる日影哉　文光

秋寒し除て日に生る山の雲　甫山

窓障子の間に向けて烽寒し　棣々

梧の木の間に傾きより秋寒し　薪水

朝寒

朝寒や月の光障の簷の史　采角

朝寒や時々蔓しと見ゆ家　為上女

朝寒や机に向ふ手習子　竹写

朝寒を見せて居る孩の美人哉　山樵

稲妻や兄の手枕妹の顔　甫石
稲妻や西行の寺の手洗鉢　無中
稲妻や入てしくる鞍射米　友之
稲妻の隣の小けや庭の草　陶蝴
稲妻や螢火の消る叢蔭　半仏
稲妻や楊の先見ゆ古松　西よ女
稲妻や牛房の実あら袖に付く　然窓
稲妻や薬売捨てる備手口　菁谷
稲妻や禅ゆらく角力取　宗貞
稲妻を見皆ま居や寄る上　天里
稲妻の重る雲の光り哉　東鶯

夜寒

神ゝの留守も居訓伴夜寒かな　作可
我一心の寐覚定ぬ夜寒かな　堅衛
つ見のめ切寄す聞る夜寒哉　薪水
御燈の光る夜寒や聖愛　芦帆
いろいろ神風に醒る夜寒かな　仝
草紙よみて涙をこぼん夜寒かな　云子
京升を寄せてよき庭夜寒かな　仝
居風呂の時宜不果ぬ夜寒かな　道雄
都まで加茂川なして夜寒かな　素汰
揃へ出して見ても夜寒の風味かな　文光
雨垂の二つ指手も夜寒かな　棣く

うそ寒

古橋の秋寒しらぬ儒子鞋　隨娟
蓼蕪の有ちて集へる秋寒し　不流
山寒く鮮雲の風吹秋寒し　桃鳩
雑談を吹きたて来ねば秋寒し　多よ女
酒桶の菊も街に秋寒し　一具
ちくちくと離る町の秋寒し　市席
浪よけの乳板なる秋寒し　猫子
樵をしての帰る秋寒し　芦月
山の日影に見えて秋寒の戸口哉　石莠
腐るかあるかなの香を秋寒し　月峴
うそ寒く来や見朝の屋　不曲

野分

釜焚も蚊も走るす野分哉　梅関
懐へ雨のはこんで野分かな　若機
うんてきと野分の末や笛一つ　多よ女
野分の後の旅山伏の衣　素泉
まる月もうたて野分野分哉　汝雪
秋なる雁も起き色や野分哉　稲若
野分して竹や林しえ浜の家　雨驚
次の径の野分ふる野分哉　友之
とへ宿と鍬の吹ちてる野分哉　木公
なけ毛ちら鳥のかへる野分哉　雨査
那の炊て稲千野分一つ　篤笠

秋夜

秋雨

片家の片よ移らし灯影かな　菜瓶

雑ゆや灯影さる秋の一ちらし　愚本

蜂の乾や自在と響く鳴声　一具

二三日降せぬに蜂の色　芳井

秋の色人の留守を降すなり　壷半

秋の取く崖も明ぬ秋の色　以蔵

秋の色庵ありし家の焼垣　蝶巣

傘さゝぬ夕川之蜂の雨　井逸

傾籠の移替くなし秋の色　竹可

出る来もうつ寺をや蜂の雨　里朴

稲棚の一人籠りて明ぬの色　南安

初汐

秋月

雨の尾を繕んて寺の秋の雨　荷可

葉隠へ下りても明るや蜂の色　蕉水

夕川の宿や舟て蜂の色　戴星

茅葺の上をもまし秋の色　未司

蕗ふく人隠れて淋し蜂の色　未宜

妻山のもちつと舎て秋の雨　義羊

初汐と妻来て明や蔵の宿　自石

ひとつ汐や法壇在る柳の上　守啓

初去る手当をて益出初武　万里

何気なく眺めてあり秋のくれ　来及

世の中を忘て婦し秋の月　羽前　三丁

三日月

貞ゝ六面白き物我秋のこと　蕉丘

十六夜のいさよふ空も後秋の月　風石

内陣に友達持て妹の月　太橘

三日月や津まつ立つや未曲きし　文鬼

三日月に勝ちも向ふる田守かな　眉蕉

橋戸路や波手番も三日の月　雑圃

夜さらす家来図南や三日形き　石上

待宵

待宵や子芦新しく風清く　応已

まつ宵の人鐵よせ田舎かな　茶方

待宵や鉢台も夏居をで後　蘇和

待宵や戸をも操ゝ　椿海

小望月

待宵や木槿光る垣の植　南安

待宵やもちかくも雑の隣のよろこ　左翠

蒼る息く竹の葉新しや小望月　真亮

景勝の風も月見たる笑ひ声　手猶

夜ぬきうす草雑も宿る月見かな　獺雀

月見

急も忘れぬ客を呼び月見かな　松月

木菩を後ゝ忘るる月見哉　一斎

月見とも所安からぬ座敷かな　山笑

隣手より浦の近さ見る月見かな　芳谷

何ゝもつて人の河ちも月見かな　素及

寄合もあらて月見る一人哉　双之

陸奥

一丈の枝おしある月見哉　　市山

寄の信子浮て舩の月見哉　　雨竹

痛る往来も我を殊見えぬ哉　　松秀

宵寝して月見ぬ事を恥る哉　　不曲

構出る人を恨みて月見の松　　悠雲

船路の高徳ありて月見哉　　素右

嫁ありる人を恨みて月見哉　　馬上安

大空を船に乗りていかにいふ　　六楼

宮浦の景を見てある月見哉　　貝谷

禅の尼ありて来しかた見る哉　　鶏巣

中段の鉄も切ていて月見哉　　涼谷

名月

名月や物みなひとつ松の雪　　貞雄

名月や行秋すぐる椎の風　　馬上安

名月や松に遊ぶる留袋　　松月

名月の松ある山里も月松哉　　竹宇

名月も出てくる雲を借る色　　双二

名月の麓ふと松にみかへる　　文游

名月や潮に浮ける面影　　荷丁

名月の晴て出来ぬ海の銅　　芳凡

名月の私に雨となる海の影　　夕山

名月の桜より山家をも影ぶ　　吟霞

名月の静かなる夜や名所ぞ寺　　梅渓

名月や短冊懸し庵の柱　五雲
名月や沙つの男や日の入ぬ　道雄
名月や樽を枕に一寐入　月秀
名月や木の子雀の寄りきる　文廣
名月や海人が庭も菜般若　梅雲
名月や何木をえらも松ばしら　蒼文
名月や心も四尾も軒並び　示秀
名月や盛て辛き唐からし　巨臺
名月や真菰の上に降る針　梅周
秋すそ咲名月を寐つき竃　赤麓
名月に見しまして何丘の露　京左

名月に名々や山家の内人数　家付
名月や隣に出ぬ縁の先　羽人
名月や旅ねも葬の花しの　霞峯
名月や小夜の友にも鳴の数　蕉雨
名月や以で来人々二三行　五秀
名月や以つれも鈍松の影　量山
名月や松を肩荷子小舟漕　如蓬
名月や地代の扁し棄畑　惟学
名月や香所さらや孔雀店　龍化
名月や律に一杯宿かられ　篠山
名月の明ぬ内より比叡山　想雲

名月や浪の上ゆく浪のおと　千之

名月に黒い雲の軒ヶ端　久臧

名月や人の心もまだ知らず　可年

名月や雲もまばらに蕗の葉　二了

名月や豆腐の[illegible]作枕　一貝

名月や[illegible]庭の松　菜鄰

名月や一里出ても舟の客　布聲

名月や嵐の後の山の崎　青霞

名月や霧に消えても柳樗　春荒

名月の霧も風ある梢かな　梅女

名月や不作ともみえぬ力持　松秀

今日月

名月や塔をはなれて七曲り　麻谷

名月や薄の露を横たへる　一陽

[illegible]　謝堂

[illegible]の月　琴浦

[illegible]　千轄

今日の月[illegible]　有く

嵐山[illegible]の月　尚古

西[illegible]　文和

[illegible]の月[illegible]　琴浦

[illegible]　田革

[illegible]今日の月　笑盧

待側く行きもきうえ今宵の月　松秀
糸操く松子蕎もやけふかなこ　不流
鞦韆も住吉仰や今宵の月　古箏
露くや尤ん尚白も繕くけふのこと　為よ安
よ以雲子孫院いお印てけふの月　半信
高宮は星の句は月満ら今宵の月　二了
津へをふてかん布しろ稚けふのこと　昂湖
半高宮の川を被り雪ふの巨　まる絶
川床や栗赤殺でけふのこと　涼谷
人嫌ひ太夜宮子迄之宵の月　仝
汝不子ぞ宮の待くや宵宮の月　仝

月今宵

巻きし秋の名も名を毛月今宵　雅柳
剥りくと飛乞の人に月てよひ　名松
錦繍し月も今宵と来る窓　四葉
月今宵唐出ん女子跡る古　史川
任有ん月や今宵の八重葎　存庵
庭東程見ゆ新むし月今宵　天山

十五夜

十五秋ハ月のとし柾秋之冬り　茶径

十六夜

十六秋や粉杯に露るの稼　下総　一甫
以下へ見も川一寸以の月秋かな　子梧
十六秋やくしとなく見え名あん　鶯笠
以さよふに丸山より運ふ雨印し　素石

月

さやかなの通ひて汐十六夜　古翠
十六夜も月し借苦や舟の音　一具
芋の葉にころよふ月の露の粒　二丘
静かなる小窓の月や寒くし　古陸
篝らけて流を掃ふる月夜かな　如水
はなゝくの人家一つの月夜かな　琴浦
世の雲もたし慈悲て一人月夜かれ　泊丈
月夜之藥盛人も待けん　芦帆
猿ほけに縁て庵の月夜かな　素子
掛子きし木の細き影月夜かな　民球
たゆし雨もる雲て旅の月　桂海

照斗して月まる人も寝ぬ夜かし　二丘
松の上に白波ともる月夜かな　玄々
聖の人る縁を月と光らせ庵　赤葉
森の紙鳥に出けり峰の月　篁水
様の起せる絶て出けり庭の月にて　耕香女
細きし解の末て在る月夜かな　吏川
松植て月の庵と来るゝ　李朗
日の影に月の出て在り深し哉　松舎
思ひ立の来て宵に月の雲　貞雄
庭の月折く雲に盗まれて　松秀
月の夜や笛よりも居え入れ　篠山

二松とて松見えて月の一松かな　雉墳

押も形くと高き虫の声や月の前　大梅

蓮の葉や月の見えし一雫　久蔵

猶くまて月見る人静かなり　大貴

吹かぬ身は露ても上げ見と月柱ハ　昂謝

夜寒や芋逢ふ鏡と月残し　仝

久方の月まて高秋の光りかな　一貝

夜深き月ま露ぬ家五六軒　路菜

夜はまる家ある月の山雲られ　布摩公

藤米ふるも見おしき月にかるかり　市公

面白や月よ身をまる連の葉　青亀

豆の売澤山松かな月夜かな　文森

竹なぬ揺し〜見ても何ろ人影のさし　羽白

稲揺て須へ揉も月夜かな　菜瓶

秋高く乳光揉て出けり月夜かな　妹豊

月のくまえ廉ぬ露ろも同る揺子　左峯

法座の月して暮る女かな　仝

底く来種酒呑む月夜哉　南く

掛て来る松よ恋す月の雲　呉洋

以まし高月の心よ草の宿　甫月

町中をえのりて宮のうち　草井

月影や尾かさまりて小庵笠　桂菜

月雲

是よりは橋の下や月の雲　菊濤

法香は一ぶりりやうの雲　淡斎

鐘の音に雲消ゆるや月の雲　桐雨

盃のまゝやね中や月の雲　月峴

月雨

月の雨何を手本につゝむらん　謝堂

月の雨果報はまた松の雲　三桃

放生會

人毎にたよりの日あり放生會　九峴

籠の鳥風来も見えや放生會　菜瓶

放鳥

乳椋に来て手振るや放し鳥　素来

声へも中鳴く声や放し鳥　亭魯

駒迎

世人にまた手枕や駒むかへ　葉蹊

尾花

憐れ九の菴へと去りし駒迎　思文

沙汰様よまき見えず尾花かな　千穂

此頃の日和も尾花男哉　二丘

来る人に秋は尾花のなびきかな　五峴

月の出る方へ振向尾花かな　一芭

橋の上で一戦は尾花哉　松濤

風止みし後も尾花の身なりかな　楽石

羽前
雪に吹く尾の香やし神男哉　不朴

手借りて庵を出ぬけり尾花哉　一の傳之

撫でつゝ旅人を招く尾花哉　ぬ仙

熊谷へ消ゆる野原の尾花男哉　万里

紫苑

寸角の住ぬ庵あの戸口哉　陸奥 俵汐
おと葉の咲より上に紫苑かな　謝堂
香るまで折ほし志をかな　甫こ
咲かしく今折しくる紫苑かな　素竹
伸る程秋を離ぬ紫苑の花　楽水
垣根より見も見ゆる紫苑哉　笠彼 一甫
動きなき風の彩さんとあるもの哉　羽人
函好の後住居りて紫苑哉　万里
夕寸の日影の横に紫苑かな　石持
紫苑にも咲や小山の錦りの風　布摩
卦中も秋風凄く高きかな　芦帆

雞頭

咲折て旭の赤も紫苑の花　芦宣
程もえて赤かりし秋風の紫苑かな　花来
咲初し日より忘れて雞頭花　文鵬
家の枝露まで赤り雞頭花　松和
無き外し秋の光や雞頭花　羽人
雞頭よく咲きて猶離岸　花来
雞頭や植かへて家の錦哉　雨芳
秋風の行末長くもん雞頭花　陶烟
雞頭や世を捨し　一具
雞頭の赤や義し文月哉　素考
けとうや露　桂芳女

秋

○廿三

鶉なくや夜ハ枕まで捨手口　筑後 一甫

鶏頭の種こぼしけり籠のうち　素也

鶏頭や蓍とならぬ日もなし　集及

隣の子鶏頭高し垣の上　角上女

山伏の借家あまる鶏頭花　汀虎

新家まて赤鶏頭の入日かな　木公

鶏頭も高くあるや非人小屋　角上女

木犀

木犀に伽の消るや夜話人　等兄

木犀や遠寺の風の隣かな　呼友

木犀に錺てゐる連歌の社　角上女

木犀の咲くや伏見の人さく家　宗丸

蕎麦花

日和よくよけれ世ハ荒し蕎麦の花　雄鋭

霜後をまつ手の降や蕎麦の花　夕山

む蕎麦や月夜の朧をしのぶ夜　向朔

咲ふりし宮の鉢にかけ捨ての花　芸中

木の株を踏まへて花もる蕎麦　二丘

高麦の盛りおもひ出て蕎麦の花　久蔵

花野

出船の花野の中を捨てる花　冬人

萩ハ花野の中を花　丁知

雨ふりて去るを惜む野の雲　政寿女

裕見て蝶付けし花野哉　玄子

兄弟も花野を出し花　道雄

大蓼
穂蓼

何処やら蛙の形ある花穂かな　正令
風寒く小松もろとも花穂かな　久山
格子の花見し後や花穂もち　向壺
五六代前植しを折りし花穂かな　文和
松一木取る跡寒し花穂かな　花甲
拾ひ物の鐵ならぬる花穂哉　惟舟
山寺に一里隔てし兼穂一の花　志省
花穂の花穂も一人通りの道　布摩
菓子屋の味あり、も夫花穂かな　圭兎
大蓼の大とは見えて咲にけり　仝
風吹の絶えて折に文穂蓼かな　陶烟

刈萱
萱穂
芦
蔦
木通
鬼灯

夕かやの穂波打てる萱の露　吉機
鶯鳴の声きこゆると萱穂かな　為之女
根もとも老人種に咲て芦穂かな　半山
月一夜して伸ぬ蔦のはつり　耕水
手角して山路にまよふや垣の蔦　楳泉
里の子の杖にするなる木通哉　梅園
葉隠や柏木の端山の木通赤　然笑
鬼灯に鬼ともみ初めの雛　桂蘭女
鬼灯を寝ても離さぬ孫哉　為よの女
實ことさらの墓に生ける鬼灯かな　友之
鬼灯を小耳に背負ふ後住哉　亭鳥

唐辛子

鬼灯と云はれても猶も無眼　ちゝ良
おもはずや名日さし出す草の奥　吉機
毘藍と用ゆ畑やとうがらし　学井
聖者ても赤きやはり唐辛子　桃海
辛かつた口の味も青しとうがらし　川长
実は赤く掛て言入やとうのからし　猶壱
日の影の曲る来ても唐辛子　松雫
丸一つ見てしてみるとうがらし　日人
吟咏の種や唐人のとうがらし　吟霞
一つもよ二つも終に唐辛子　東路
懸子も多婆は持れとうがらし　為よ女

懸稲

稲

稲刈

たゞよひの蕃で行くとうがらし　行危
蘇ちぢへ昔の子どもねとうがらし　庚年
軍用の例をもみる唐からし　名杉
出来稲や持つくり懸し厩迄　里竹
手道りの稲に遊ぶや一家内　未蕣
釜稲や秀月出る小篠川　阿芳
子を稲に負まで吹くも稲の風　龙斎
稲干すに雀僕らし小鳥哉　笠彼　一甫
稲積て南の所の煙炊　慈菜
稲刈の跡して淋し杜若　為よ女
稲刈の其跡見せて小町代　一露

中稲　晩稲　稲舟　稲穂　綿取

稲刈し後の月夜や雀の隅　永呂
稲負ふや麻刈る月の淀み哉　松丘
二の丸に二畝植ゑる中稲かな　大貴
晩中闇に浦秋の晩稲かな　雛岡
蒸るゝ日をふと見る晩稲刈　雁行
稲舟や湖の家見て遅し　巴一
稲舟の棹手代ふや柿本　亭柱
三日月や稲穂舟の淀み哉　不流
庵の留守に通ふる稲穂かな　大梅
一つ穂も携へて帰る家の風　羽人
綿取や秋さへ濡るゝ露の中　暮雀

大豆曳　粟　黍　芋　莨

大豆曳て手代りて脱ぐ羽織かな　二丘
粟刈や夕日の揉る粟穂かな　雁嶺
まつ刈て蒸る粟穂かな　桐雨
風ふくと動く粟穂かな　吟霞
粟の穂の上に赤き蜻蛉かな　生花笑
旅人の袖に通るや粟の露　庚年
日ぐらしや秋の黍の香　棲海
芋畑や青く露の中　小圃
芋の葉や家の前に　昆湖
芋畑の通ふ道の露　仝
稲干すや莨干す庭に雀　千松

辛子蒔

移さて莨所あまりに秋を住きて　布席

月よしと今まひ畑窓や辛子蒔　南よ女

茸狩

茸狩や近きへつゝも先へぬけ　雲篗

茸がりの物衣しまり二日月　間蕉

茸がりや従者の墓へ見に廻る　芦帆

あけ狩の終に淋しき木の雫　仝

茸狩や母の出代も憐む　古琴

茸狩のひまに人秘る俵しき　名妓　一甫

あけ狩や白きたてよ雲の何　南よ女

茸狩や終ぬよ得出ぬ風の舞　一貝

茸狩や盈くに枝る秋の暮　吟霞

菌

笹緘よ峰り倉り菌かな　宗飛

見し来て秋よそゝる菌かな　芦月

女らの手のあまし見や雑木の子　民珠

杉さへ鳥も来ぬ菌かな　呆水

卜治

露のむるゆうよ触るや初卜治　三挑

松露

松雨の音掃よせる松露かな　不曲

小松ゝ縄挽てゆる松露かな　雲篗

見つるゝや松露かくす子の手の跡　布席

松茸

松茸の取乙し下ゆく薬の味　大山

松茸や笠の日影よ旅立ち　蓼雨

蟋蟀

折りて泣ゆや国府の育井　古陸

蟖しの気夜さも鳴出けりかな　棠郎
夜住む此手能きゝやきゝもくれ　文山
鳴りくれ色のきゝれたし月の中　應雨
庵の黒いや古びてきゝりくせ　芝葉
身近く夜に亦も雲や鳴りくれ　漆海
蟖すく家俵もしらぬ蟋蟀　東水
森蟖するゝ小家や月と鳴りくす　梅園
きゝもくせ二日続月の波し変　乙光
絶ゆる萩桶の中や蟋蟀　烏よ女
鳴けば声く鳴の四隅の鳴りくす　仝
雪ての雨も鳴りてきゝりくれ　半玉

蚯蚓
渡鳥

小庭分の縁を渡る夜きりくす　貝谷
馬のかや穂も持て鳴蟋蟀　半遊
夜上りて土方掃寄や鳴りくせ　永木
宵く気変も雲くきりくれ　桐雨
蟋蟀足乾く気あらくれ　野洲
帰ゝる夜と持も元寺の鳴蚯蚓　蕉琴
宵月をゆりし鳴き蚯蚓鳴　素牧
松の花庭く渡る小鳥哉　山雄
黄昏を波しくしはよ渡り鳥　政多女
持出く寺かてしる気や渡り鳥　稲谷
夜や春夜の雲て舞ひ渡り鳥　赤葉

燕

行

一筋に見えけり燕のかへる　鹿翠
山風に先崎や燕のかへる　葛雨
築の上に笠山まてかへる　永峯
巣守し声をかしし燕のかへる　巣守
燕の来ぬ門の桜もかへる頃　如蓬
燕に二百詳月やかへる　為よし
燕のもえもえかも嫌ひ燕のかへる　蜀彷
一燕の蕊に濡れつかへるの声　布席
物干に帰燕日和や燕の帰る　大貴
川上は信濃へ雲やかへる燕　学井
乙鳥も大寸帰りね軒の宿　二涸

雁

菰を編かね軒に田の道を　鹿翠
住吉に名残々々ゆく燕　葛雨
行はとまりでうしき蘇に春の空　花甲
乙鳥けりやとも果ての山の雲　雨萤女
帰る夜は料理の方まてか小鳥篭　竹里
小荷物の秋が来しに別れまて　香浦
雁の見を蕊見送りし東橋　松白花
崑蒻の玉から日に帰るの来る　甫不
雨風に乾く田の村や雁の声　東三
百舌も一ふく香やこの秋　玉子
焼所の露ある袖や隣の声　仝

雁啼や山まの入る丸の中　左琴
寄りくる柱なき世て雁のこゑ　仝
一列に螺に従ふよ去津戸　涼苻
雁鳴くや元洗濯の桝あみ出　仝
雁の啼下よりくる入江哉　桐宜
雨雲の堆さき重る大海の雁　仝
以つ可なや起きて旅くも渡る戸　鶯笠
雁鳴くや傍に一人求瓢　節之
来かしるよ以そ雁なや小田の雁　田華
若の子に日和追ひね雁の声　乙光
一つ通りし静る月や渡る戸　雨汀

更に新の行くしわくる戸　松舎
寿近く餘りに岩行く松の雁　不曲
百陸も泣かさる降りかへる戸　永昌
戸下よ波よ音の月く名　虎林
曳茅にくる物や戸の杵　松雲
との山も月満に雁の来るらむ　量山
荒様や懸も以まや若の雁　左翠
此かのうし凡や渡る雁　畫半
落ちても去りて渡る楓風哉　易足
静かの雨よ降りて戸の雁　松井
来かや落ちしぬ戸の声　雉冏

鶉

初鶉や今ハ出て来る松の雲　南上女
人鳴や下紙を鑿笹の脇　仝
追ふほどに初鶉よ寄りあひの庭　茶静
椋みくらの林しづかに鶉や人の恋　一蕙
人の来ぬ庵は垂ぬ宮に川　桂秀
世遊作舟の枕唱や人の声　月岷
鶉鳴や今の作を川ほとり　仝
わへごとも鶉の下見る外田哉　凉谷
鶉鳴や江に横たふる梔の色　南上亭
家ぎはの鶉や冬の小庭の夕烟　華亭
昨日は古き松としく鶉の声　伯大

五六俵枕に夜の鶉の声　素石
鶉ゐるや雨や日たして鶉の夢　稲村
鶉なくや那含の夕月ぞ　桂萌女
撲に生きるの蔓鶉の声　友之
来や木の絶頂て鶉の行　名坂 一甫
初る子雨に続く鶉の声　仝
鶉鳴や不二を眺る　示氷
鶉籠の残く天や鶉の宿　蒲母
鶉でる草の鶉の声　大貫
鶉鳴や西へ向く草の花　史千
鶉鳴や畑へ揚る菊の照　久佳之

鴫

東ゟ白み桜にかゝえて鴫の声
休圃

五六羽鴫たつ先の明り哉
文光

鴫の住く水筋の流る出水哉
巨童

淺くなる田のくろや鴫の声
花甲

山くれて鴫より低し森てゐる
史子

鴫たつや舟の明りの草まくら
卜山

冬株をまかしれ鴫の森まて恋
峰友

鴫立てハ二枚田の背まて澤
古川

旅なりに宿かる人をて鴫の声
庭雨

鴫立てすへ星飛ぶ田の一の秋
和宜

こゝの鴫の白子摘るや去梅所
素共

啄木鳥

鶉

昔の杖もよし集めや啄の声
楽水

野分あや啄木鳥鳴て鐘礼
葉瓶

猪月の囲炉裏よ洩れや鳴鶉
尚よ女

菜畑の田も更入よしなく鶉
仝

鶉鳴る足軽町の畑一の升
芳井

遊くしと鶉鳴かしまかせ庵
玉葉

起て鳴ハ寸角違ふ鶉一の秋
湖平

街道の人も通るや鶉鳴
芳谷

月落て草よ人なり暮く鶉
文偶

乃連ゝ草見て道や鳴鶉
梅雪

押分ぬ人の篠にも鳴り鶉
素芯

小雀
椋鳥
鶺鴒
鳩吹

[illegible]鶺鴒　求芳

男気[illegible]鶺鴒　篠山

[illegible]鶺鴒　野冰

[illegible]鶺鴒　仝

[illegible]鶺鴒哉　夕山

[illegible]小雀[illegible]　一甫

椋鳥や[illegible]松　芦月

鶺鴒の[illegible]　篠山

[illegible]　西冶

鳩吹[illegible]　雁堂

[illegible]　菜雛

稲雀
鶉
鹿

[illegible]　美文

連[illegible]稲雀　桐雨

日の[illegible]雀　不曲

[illegible]鶉の声　蕉盃

[illegible]　鷺栄

[illegible]　素竹

[illegible]　風毛

[illegible]　夕山

[illegible]　桐弓

[illegible]　栗笑

[illegible]山や秋の声　嵘洋

浦のこさるゝ釜や早苗秋の色　札月
竹取るも雁や里の犬　戴星
雨に纏の止て雁がね一ツ　全
松の手折たる岩ひさし雁の声　石沈
こゝろ定て飯にせん庵や秋の暮　亦斗女
きりぎりすと寝ぬ月夜し雁の秋　素子
秋晴や白き羽をも岸の桐利　二丘
雁鳴や明かしてき日山　桐宣
菊の又山より出て一ツ秋　蜀絲
秋の末の物淋し雁の声　文庚
雨と来て月も淋し秋のくれ　文和

秋の夜の民の竈もまたほそくなり　兀々
雁の来て川を越えて吉野し　一趣
雁来ての荒ぶるに入や蜻の秋　云々
雁に横はる雁上り　陸奥　鶯笠
山ぎはも仏井や雁の秋　東山
照る月を去りゆくや秋の鳴く声　来水
岩端に寄りて行くや雁二ツ　学井
秋ゆふ暮の庵や雁の聲　魚本
暁や霧て秋の末きゆる　墨山
米搗も耳を澄ます月の秋　古寥
雁鳴や今宵の雲も波に漂ひ　乙貞

小男鹿の足あらふや川の鰐　為よ女
来て居て空ゆかしさ鹿の声　仝
宵の鹿の夜明てハ枕かな　白人
鹿の声りさうの新のみこゝる　柔斯
啼鹿の上にも昧ぬ鹿の声　布麿
啼かけし鹿作向や鹿の声　桂秀
鹿の啼夜半寄る枕の山　素寛
鹿なくや妻れハ寄り響ふ家　仝
啼ゝ寄る鹿の相に有月夜かな　源谷
北嶺や町人住て鹿の声　二了
凄さうく聲も乾ん鹿の色　三桃

秋

落鮎
淡鮎
沙魚
彼岸

鹿啼やまくら寝ぬ家もなかりける　來水
啼ぬ鹿の良ところある月夜かな　節之
鹿の声に驚く物も見える秋　仝
月落て夜隠くし鹿の声　四□
鹿呼の鹿に驚く谷の奥　仝
薩摩の国まで聞く鹿の色　幻芝
落鮎や岸の水に消えにけり　風毛
見るにつけ鮎の流るゝや市の前　素去
打くる沙魚釣る笠の中　龍化
萬年元声の月にかく彼岸かな　井園
よく見てハ彼岸の彼岸かな　素有

乳のある花咲くあはれむ小萩原　維乙
小萩原町より山は雲かゝる　不材
足弱は秋もよろしき野路かな　日人
咲けん木の葉の里は見ぬ花も　鳴湖
一息に萩に萩見る萩の野　一樓
秋もいと椿に宿ん小萩原　寺凱
黄昏の出る山もしかく小萩原　古橋
小萩原隣家かる秋の浅からく　廉谷
小萩原かぶの隣家にあぶれ花　霞竹
手借る秋に雨降る小萩原　荷丁
子似合ふ萩の露もかし萩の花　一霞

衣擣

葉とも衣打つ中や小構さる中に　男微
衣打つや隣家も歎くて付易き　謝堂

九月

穐之部下

塚石前の山よりうつる九月哉　昭眉

峰自耗ありて露も世の九月哉　雄嶺

高所木の間に出てうつる九月哉　友之

淋しさの峰にうつる九月哉　東京 瑞斎

あらきてを出ハ置ある九月哉　小圃

長月

長月や何とて急く峰の雲　涼谷

後雛

又出しも日に當十を後の雛　積翠

並ぶ屋よ見附て飾し秋の雛　〇く

外市
后月

田や畑の物成もとし井の手　一具
果もなきよ田畑の上や后の月　亀女
四十年居並し後の月　鳳毛
草の松の間もれし后の月　山雄
今出し雨の掃や後の月　杜貲
一とせ秋に住居やのちの月　何年
みなかみの晦日の后の月　菊々
野あの光もたかき後の月　峨洋
古の縁はかかり后の月　業月
廣大な古松畑や後の月　友之
田の畔の豆も蒔て后の月　左坐

荒波の灯りもかくれ后の月　吟霞
芦の花枯せし後や后の月　尚古
見るよ何人よも蒔る後の月　李涼
よの露に秀月の露や後の月　一陽
曽我の淋しさも后の月　名然　一甫
日當りもよき田の上や后の月　素石
見る人に減てさかし後の月　葛松
何もなき身の展雑や后の月　貞雄
新宜枯れね椎山の神や后の月　不曲
草の戸や蕎麦粉も古き后の月　有秀
家新も家近し後の月　雲峯

粉菜も妻の世話やく後の月　照雲

侍の宿く先しるや后のこと　田翁

后の月家内も気の嵐手書　分安

面白や空ゆ出し笛の後の月　大梅

裏向の雨も隔りて后の月　岸蔭

琵琶嶋子古物店の後の月　志者

兄達の羽織て出ゆる后のこと　芳花

似気なく仕合や戻りて後の月　芦月

羽前

後の月枝見物する醴の花　丁考

柿の木や白く市程りと后のこと　一具

桶樽の縁ふ吹くし后の月　小圃

十三夜

後の月面白く流し行雲迫し　鉄巣

菜の上ふ庭の紆まる月見哉　蘇く

皐月の豊と見ゆる新や后のこと　布席

秋よけの楷にくし後の月　仝

后の月居あかぬ家ふ更る水　遅流

后のこと蕗の通ふ浅路出　稼哉

株言の大蓮池や後のこと　琢谷

薦縁を掃く家之后の月　泳水

後の月留りまぬよ子るかれ也　古翠

秋の水ふり空ゆ寒る后のこと　幻芝

浅香の吹れる事や十三夜　竹里

月名残

秋山

山里の月と来たり十三夜　眉蔭

名残を惜しむも遅し十三夜　乙貞

今宵の一月の出る迄十三夜　雉嶺

[illegible]の[illegible]手の十三夜　一蕙

名残[illegible]松と月　耕雲斎

[illegible]名残の月や後の名　一也

掃きよする落葉の音や秋の山　古隆

澤の音[illegible]秋の山　碧浦

緑蛇の青や[illegible]錦の山　竹手

錦の山松一もとに[illegible]　粟実

岩石の上さへ[illegible]秋の山　南石

秋雲

秋日

渡り鳥[illegible]錦の山　尚古

[illegible]秋の山　楽水

秋の山[illegible]　一陽

[illegible]秋の[illegible]　古黎

[illegible]秋の[illegible]　東波

秋の雲[illegible]雲行川　三丁

嵐山へ[illegible]秋日和　友之

秋の日[illegible]秋日和　芭角

秋の日の[illegible]　一貝

一帯[illegible]山や秋日和　一梅

秋の日[illegible]　笛蔭　一甫

秋水

秋霜

秋空

秋の日の空へ出て行ふ雨かな　休臺

秋の日や小魚見えて水浅く　超雲

蜂の日や大樹を伐し跡に出る　未水

秋しもや秋を待る青や秋の水　大笠

彼方も音のちるらん蜂の水　若彼 一甫

人より先に遊ぶ川辺のしぐれ　三丁

四年越の今日細や秋の霜　雉嶺

帝社の松経ひや秋の霜　学井

摩耶より見下ろす秋の空　文游

鉄槌き明けん山行く秋の空　岩之

清竃も一股に傘ん蜂の空　斗玉

菊

宵に露とこそ来る秋の花　嵐翁

是も黄に形見も花しさなりけむ　岐久志

人にしる菊とて我あきも深し　雨考

菊の日や嫁入よむ松の神酒　磐浦

菊と我名はよしあねど枝折れ　文游

今年の菊よ日の盛植る哉　文翁

さく頃て人好き夜宿る　休圃

また咲の花の頃より咲くのま　キ山

異ものなし黄ひろき菊　杏園

我もの手習ひの菊の花　荷了

菊の香や急ぐねせよて急ぎけり　耕雲女

念仏と菊三昧の主なり　なよ女

庵のあるじの薄まで風情な菊の主　栗笑

稲織きて又見るや菊の花　仝

体に菊群の青や菊の花　一之

手紙にて辞退する光や菊の露　仝

朧菊に菊咲して垂鹿あり　夕山

米蒔かずして着る菊の露　素白

下戸達の施にあるや菊の花　素丸

一おに鎌る日和や菊の花　月下

行徳に日のたんぽや菊の花　鷹白

芸白あり菊の[illegible]菊の花　芝葉

咲きて菊見に廻る[illegible]　稲然

[illegible]二[illegible]菊の花　石上

菊[illegible]の[illegible]見るかな　蕉平

隣の[illegible]や菊の[illegible]　芦月

菊[illegible]庭[illegible]菊の[illegible]　仝

世の中の菊と[illegible]九日かな　友之

枝[illegible]菊の[illegible]　左堂

手[illegible]菊の[illegible]　仝

山里[illegible]菊の花　木公

稲乳の[illegible]菊の花　仝

菊[illegible]人ね菊の花　亭者

菊の香や匂ひ美し菜肴持　桐圓

秋霧や子姪定まる菊の色　名波　一甫

夜引ら紫内さしるや菊の花　正令

黄も白も秋の住くさくの顔　一超

世の味も香りて保るや菊の色　吾村

黄合てきくれ左の訳ぐさ　一陽

暑さくく脩のうへて菊の露　名波　一甫

折まさへ光かし飛紫菊の色　丟く

寒さくれ露も乾くね手羅武　琴浦

塀の松生し必蕪佗ろん　素央

曳所ち曲りそね菊の匂ひ哉　秋登

咲けりと走る色出を見ゝ畑　蔀之

来ぬとらふ使す菊も見つくし　松海

桿糖の端まけ封や菊の色し　箕夫

菊の主香も氏衣忘ひ哉　播女

詠まる月ハ忍ふれ根笹の菊　鷺宗

人寄し山路の菊や狭霧の菊　仝

門違ひまさる〳〵ハ歩し菊の花　学井

菊の馬や月の比しる料理の宿　文光

湫傍らく裾みきる折や庵の菊　古峯

菜大根も陽白夜や菊の色　仝

読見ぬ字もしつかなる菊の花　文鬼

小利口に物云ぬ菊の使哉　巨童

赤菊に露かゝるやあはくしき　玉和久

志ら菊の雲となりけり庵の秋　松和

一人住く散りて出るや菊の露　二洞

例ならぬよりは葉茂はぬ菊作　竹来

見る程の菊も又花も南部哉　青水

綾なりね種々に結なり庵のきく　星山

世之なり月の友哉にきくの友　如蓬

菊さくや殻の名の付る据本　花甲

絵の我迄並に黄菊哉　惟学

瘦手に似合ね菊の主かな　古峯

菊作る人ともしらく春になる　田甫

盛く咲分は日に近き七大寺　霞珠

日あたりに思程の中乳菊の花　多女

つまりし鏡山のかゝるや菊の影　仝

菊の香や旅役にかくし浮世也　左瓢

露井峰折自や折くの花　久蔵

古よひ花の情まさるもさよ菊作　与鳥

物に縁身の栽や折くの花　大貴

菊さくや世に出し人の備かな　庚年

采菊や見る五把も畑　昇湖

菊の香残後や常から庵本近　霞窓

咲けばまた咲きて来し菊と菊　興洲

待ち出てよみ手出かけり菊の香　竹翁

菊畑の中の通りや菊の花　一梅

其作まして菊の匂ひ哉　杉硯

十人よ知り 我の 若く見え　桐雨

精進の靈まる畑や菊の香　北巣

菊作りて背戸も新しき小柴門　布席

かくれ家も隠れて見えん菊の香　桂秀

大根をわけ出て今や手の菊　大貴

積置る落葉の畑や菊の花　涼谷

山ちまの料理来つくしきくの香　仝

株上の餅搗しけりきくの香　翁依 一甫

よく見えて葛寄る道よ菊の花　為ト女

背戸山よ 月はつ 菊の香　木然

菊の宿や笛とる宿の執住　東京 里美

作りもうと乾りけり菊の花　涼谷

大まぐや鍾小 与力断　吏川

借桶の月 まきくの花　民枝

売住の多念 菊の華　英山

手 抱よ菊の香　翁彼 幻芝

 菊の花　一甫

 きくの香　桂洲

十日菊

きく菊や破軍まつるの節　思之

白菊や露霜の後の月の宵　桐頂

一本にさく菊白く五更　双之

露なき日ハ秋の白菊の花の上　乙光

名月のともし捨ある月見かな　篠山

さく菊にかゝれしてふの頓燦気　賛谷

秋の菊一ト日おくれし今日見けり　其秀

さく菊や散るゝ枕の散りし　永笑

人の来ぬ先に菊の香をかくし置く　野拙

酒香にまじりて十日菊　文里

菊折て手向る十日かな　無牛

残菊

十日菊大名挨拶しあけにけり　巴洲

残菊や篠一ト日の摘捨し　宇秀

以[illegible]もあらぬ残り菊　古笑

さく菊の花人の来ぬまに残りけり　雄嶺

十日ミよ今日ハ咲けり残る菊　杏橋

残菊や法園ハ月の紀[illegible]　鐘平

菊酒

菊酒も十日ハ淋しき庵の客　麻く

さく酒や上戸の人ハ一[illegible]し　柳塘

末枯

末枯てまた庭の花も散りけり　棠郎

末枯や折々中[illegible]町　キ山

末枯や宿は変りし人のけり　清示

柿

末の秋や侘る花より柿喰ふ迄　守雪
末枯や木の紅葉より柿あかり　巨堂
末枯や戸板に柿を積小屋　呂湖
秋の柿白妙にへてもての行く　喜女
柿主の持もとに出て出かけれ　夕山
柿の色あらくも深し山家かな　一竹
柿の枝折せん日の陽かな　芦帆
寄　二十日の夜にとらへ柿の山家かな　三桃
里の子が手花寄せて柿一本　其席
柿赤く秋にみちたる房かな　五遊
枝柿や名ある美人の好かな　松嵐

紅葉

紅葉ちる里の手住より霧の底　花乙
楼桜に屋の中るときも紅葉哉　謝童
ここ山は今ぞ紅葉のしぐれ哉　斗米
み山の道のかのられし紅葉哉　江貫
世は秋の名に付けて紅葉哉　白起
温飩や肉を画の紅葉かな　松白丸
嵐や紅葉かけて紅葉　堯舟
降日に傷の舟したしむ紅　政女
紅葉して矢に一枝ちらん紅葉哉　雲蓉
明に酔る紅葉の陰や滝の音　峰洋
漂かくも紅葉折る物かな　古川

息らんてる前の通る紅葉哉　芦月
日の脚さして襟元ぬくし紅葉かな　玄子
紅ちて先遠くなる紅葉かな　下総　一甫
くるまりて紅葉の下の雨宿り　若林　一甫
花よりも紅葉に遊ぶ身となりぬ　玄て
古寺の紅葉の色も暮にけり　業如
手車かへしてもとをまつ紅葉　手耜
まつ紅葉より散る紅葉かな　棋海
墓原や神のけの紅葉して　波之
蜂ある程見の月見ん紅葉哉　四華
すみたる水上見えし紅葉かな　乐糸

一里程先へ見へし紅葉哉　相白
西行の語て入もとも知らぬ紅葉　永字
道よりも程は紅葉の中へぬけ入れ　為女
まん中もとの紅葉の梢の紅葉かな　太城
蜂もさや飛ぶ紅葉の中へ先紅葉哉　雉田
右借の月影の紅葉より紅葉る　史子
霧して紅葉の名見る紅葉かな　一楼
寸丈へ一先以てる紅葉かな　英山
紅葉かなや楼さて梢の下の葉内　桐石
見あきぬ西の月ある紅葉かな　一の傳之
二まとに紫紫見えし紅葉かな　芦盃

草紅葉

柿紅葉

人先へ行て見つけり紅葉かな　貞雄

荒果て後家に近よる花もちるかな　畫牛

折りても色あせてる山紅葉かな　雄裕

八しほも時雨て過しもみぢかな　庚年

淋しさや錦の付る紅葉かな　半山

家並も揃はぬ町の紅葉哉　西阜

老木より寄らで紅葉のにほひかな　布席

折てつる賣物味はふもみぢかな　菊陵　一甫

霜晴て町に入紙干もみぢかな　仝

もみけて拾ひ盤のまたまた草紅葉　頴老

川舟や苫屋の上の柿もみぢ　為よ女

柞紅葉

柚

椎

柞紅葉平の宿屋の菊まきて　竹洲

柞の木さくらも向けば染てる哉　仝

葉をも残て人呼ぶ声や柚の色に　一之

雅趣なる法師の姿やいつも柚の香　呂童

夜の月に柚の香しらず柚が黄葉哉　以蔵

竈炊の煙のたなびく柚の黄色さ　應々

雨にぬれし実の大きさや柚の香むせ　宗祀

あまきや鳥のつくねし椎拾ふ　其笑

椎の実や枝にかゝる寺の先　棣々

園の椎に椎の実落る庵かな　松月

古寺の落葉や落る椎の音かな　鳥洲

落栗
草実
柘榴
枋実
山茱萸

椎の実のおちずにかゝる棚かな　二丘
人の来る家に落るや庵の栗　鳳毛
栗むらひ落る井の小庵かな　文渕
落栗や打角様に出人もひ　木子
落栗や売人も旅の流の栗　名張　一甫
山の栗まつりにさぬてこのあり　惟学
栗の実しぐれに落る栗の音　ためよ女
草の実の横にかしまし羽織かな　二丘
人呼る山彼方や柘榴売む　ためよ女
枋の実やうらも利ぬ岩松に　仝
山茱萸や人思来たる西日かな　涼谷

鳥瓜
梅擬
籾
今年米
落穂

山茱萸に螢の出る垣かな　田草
落ちかゝる鳥も来りし鳥瓜　ためよ女
鳥瓜赤し森宮のよい所に　東亮
明もめてゆふしゆふし鳥瓜　寛堂
ゆ崖摘に住るも梅擬　斗園
色づくの葉梢にゆれし梅擬　陸奥　篠丙
まつ会の口清し梅もどき　南山
旅人よ折てゆふや梅擬　宇桂
籾干や盆の蝶を菴の丸　雄就
手も高る俵の所や今年米　孟子
落殻の鉢もこぼるる落穂かな　成家女

新蕎麦

新酒

芝原の梅をこへ田舎様かな　亥子

はふなくも鴨挽こ渡し蕎麦かな　月峴

新蕎麦や店なき人に啼る月の前　丁古

一杯新そばもやおはな尾　里恵

家あるに新酒海老や膏祭　芦帆

曲くも風も通さぬ新酒かな　宗鳥

人柄の淋しく来し新酒かな　一蕙

荒月の高麗に継ぎ見ん酒かな　素於

松風に新酒の白ふ小家かな　梅室

渡舟蔭に人来て見る新酒かな　蘭之

楓竹くれ出る門やいや新酒　月峴

酴醾

濁酒

柚味噌

秋暮

ともに添ふや一村切の山家　一甫

升上て笹葉振や濁り酒　一具

木欒の実のうちも味や柚子釜　野逊

道連にする医者の帰り秋の暮　芋井

戸あるに烟草のへるや秋の暮　竹花

淋しさに出る秋も秋の暮　昭眉

寒出の古径通る秋の人れ　芦月

京にまた到るのなし秋の暮　仝

唐の枕も蝶さへ秋の暮　素三

待ちて椽の枝ぶりや秋の暮　案似　一甫

秋の暮傳の水に遠ざかり　功里

蜻蛉の一ツと飛さく秋のくれ　蕎茎
仕事なく出ん折節や秋の暮　古翠
秋の暮萬象の上の一仕舞　貝谷
外にも無風狂しまひや秋の暮　鴨湖
呆るとて幅を急くや秋の空　仝
柴の戸やさはる露の秋の暮　丁玄
暮るれは猶よ物にかけり秋のくれ　一貝
秋の暮赤子の泣も寂しくて悲し　仝
秋のくれと以ふ人の肌も今も　存庸
葉の雨も冷えずみや秋の暮　苛谷
竹の後に炊も夜あり庵の外　里嘉

行秋

稲風呂の使に来る蜘の暮る　二丘
渋踏むと其の声や秋の暮　多丈
何もなく何思ひ行も秋のくれ　西阜
又一夜もし枕に凍風秋の暮　仝
木地揺れも里へ出るや秋の暮　如旭
気短よ出る青や秋のくれ　川石
定め様の人の往来も秋暮ぬ　其兆
又手さく見ても寒し秋の暮　葛松
行燈や香桃をちやまた露信　蓬字
中々蜘や力の何ぞ旅子売　琴浦
蔓草の末ともなりて秋の川　松丹

秋

行秋の来る月に法師や山の寺　笠依　一甫
ゆく燈や秋の恋の子の涙かな　柔付
行秋や何処の地蔵のお廻り　川岳
芭蕉く秋や蛍に旅の土の垂　松和
古家名梅や仏入りも秋の月　三水
眺めし秋の月秋や浦の松　如蓮
行秋の扇に跳る光られ　為よ女
行秋も後合い小雨晴　竹岫
ゆく燈や一むら雲に夕鐘　久蔵
引汐に蘆のゆらぎ秋の月　鶯之
立枯るる尾花に秋の月来る　田華

行燈や世の有様の月にみる　栗笑
ゆく秋や星のちらつく池の中　雅称
行燈の夜や小倉の船積霞　稲花
志ぬ竈の煙も絶えて秋の月　百拙女
行燈や日も暮れと一メ主　桂葉女
ゆく燈の人言もなかりし亀　蓬季
川秋に面影もなき猪の絶　芦丹
人八秋に焼の遠くや義ふへ　尚古
ゆく秋や引き立てて三旅寝　友之
行秋や車の軋る山の坂　井玉
行燈や家路遥かの大燈　宗馬

冬隣

冬近き秋の伴ひてつの册　松舎

きし色や紅葉して冬近き　其及

山里や紫に冬や雨備　雨芳

秋過不知

雅ある秋さぬ知しぬの秀　名技　翠琳

亀二日緑もふんと遊びたり　生円

飛ぶもの秋の暮も秋の暮　鶴湖

葉の梢も空中や淀る夕　四華

秋もまた一夜も来ぬ霜も来ぬ　太峯

眩の田の秋のおもかげ　四華

晴るく晴なり秋の社前　如旭

蜂へ来て芋茎も露の影ふぬ　羽白

九月尽

掛稲を伴ふて秋の行衛かな　松秀

橋の月人影遠ぬ九月尽　有一

古年寄を訳て行や九月尽　夕山

黄ひ気の後も分れ九月尽　志眉

菊の日の千燈さかり九月尽　一貝

杉とし出ん去なん九月尽　西阜

此橋の影の下見ゆる九月尽　為安

足元の流を踏や九月尽　露博

秋名残

莫芽子を引きる秋の名残哉　名技　一甫

浅茅や色を残すも末の秋　吐月

冬近

冬近く来や山田の捨稲　玄子

蟋蟀のまこと夜寒くや竹林寺　文鵬

萩の戸や白浜出て色秋を呼ぶ　昇洲

むかしと秋の角の月松哉　東堯

人まかく散る萩の蔦　名張　一甫

〇

風先へ高く出かゝる蔦かな　秀和

霧晴し木立の中も秋を招　仝

高ねからたかねや野の雲深し　枕亭

芒迄と森その後や乱れ哉　仝

いきつきや一足志る九本橋　羽前　柏雅

華しれ遊その替を筭えゐる　仝

朝丁を鳴て垣かきる西風哉　仝

桐疎の残り捨出し備の秋、　水竹

我風息へ熱つ月笠や見えの影　仝

中かとて来てそとの夜露飛、　仝

高借ふかる神主や四季の日　左業

色のこゝ孫子と友千疎の季　仝

とらく八竹が芭や義の中、　其水

いたよ声く菊中へ参る路の鉢　仝

一曲りかきし声や蔵し羽、　玄丈

北風に雲の宵しての川　仝

元上て宝も舞ふく一葉の花、　岩雨

足袋ぬいて寝る夜無き日の花　菊石
起〳〵の名も流れんや高き声　羽前 乙惊
秋ゝと思ひつゝし滝の音　仝
名月や防ぐ夜なき袖の露　蕉素
木ゝ葉もしり浪の花さへあはれ也　仝
祖父喰くも手を動かさぬ　七雉
三日月を見て宿る也ちぎれ出る手　仝
もうしさし尋ぬりや笠のうち　文呂
樒の蹄寄り縁へ来て来し　子積
行雲を森て残るも秋の山　仝
裏つを出れば星なりの月　是峰

鮎虫のなく〳〵ま弓や蜂の声　仝
やまし〳〵家々静かし秋の櫻　来六
煙草盆提て畑の月見かな　仝
蓋や井戸に月の影あはれ　仝
上風吹けば寅の入あはれ　石坊
嵐所に無きて雲の秋かな　仝
七夕や不燈籠のまゝ明け　羽前僧 攜月
標ゝ秋さ鈴虫鳴く蝉ひ子　仝
低き声とおもふ玉祭　仝
きつ汐のさ風や蝶の声　秀和
来る春は更無き来よ枝かな　石坊

抛ふても藪に附けり秋の声　秀和

快延にむとりさけんや鳧の声　柏雅

見くれの道をとりおぬくや雲がくれ　仝

十六夜の更るも墨とて朱ばかり　水竹

刈萩のみくう晩露くるる新酒かな　仝

手向草や米洗く青鞋ぬくて　志葉

老出る古鉄實やある夜の金　仝

生駒をうる使る楚出や青し花　仝

二稜三布小塀の中の晩稲かな　其水

追分も嵩山前や芋の葉　仝

雁坐田や一枚はるに秋の声　去丈

茸狩の刀はつくれ小さき花　仝

秋さむあしらひや鬼莫　曽雨

囲炉裏くるる宵掃わりおんぬ衣　仝

重さうに光の精や一葉かな　乙蝶

蔦まさし盃力てゆるや笠の月　仝

はやうける秋のありさ腐やけさの秋　蕉素

早稲の香の袖になれ行つきかな　仝

鬼桃ぞ雑な変を施さかな　也雑

蕣の花もいろしや垣一重　仝

去月や秋を好さ道ての川　石水

隣燈に掃出されりきりぎりす　仝

狐火の消る程なる月夜哉　石祐

玉棚や乳のみ子の名書てある　擔月

秋もはや敵なく成し廣ひ哉　仝

棟上の幣串高し秋の風　仝

名もしらぬ木の暗ちらく錦あるし　祐雅

折見るも時にいくらも落れてめくら　仝

萩の露落しさうなる枝ハ葉かし　仝

むらさきや折てもつけん菊の花　水竹

月見るも一寸も出ぬ料理人　甚兵

川舟を一寸留るや稲光り　菅西

秋風や痛気よく咳ばらひ　乙條

八瀬や時川へ月を出迎ひ舟　仝

垣ねにも見る程見ゆる川の花　世雑

志ら露の落かゝる古めの茄子かな　仝

蓮の花を寝ゆかぬ踊の輪　擔月

末ふるし祇子稲葉に置かば　仝

卅枯柳忘れし絵馬の舟　仝

有明よりも遠ざかる柳　仝

新そばや葬ひの乳華の露　素封

末ありと鳴き夜寒の菊の花　仝

いつもより月程ある株の空　吐秀

給米の尋ねし人に何る気配　仝

C九十

一本たしかも流の沽かな　陸奥　夷刈

稲妻や折りて落る雨の雫　仝

今こゝで屏風の中や坊りくれ　若俳　立角

垣越して秋の子入や豆腐嵩　仝

手出来ぬ者も旅を好やまうく畑　仝

俳諧十萬發句集　秋之部

昭和學園 短大
第 2911 號
受入 昭和 30.9.5.